

“チューケン”の挑戦

三井化学(株) マテリアルサイエンス研究所
先端技術ユニット 主席研究員 小野昇子(旧姓杉山・新制44回)



最近、職場の大先輩が筆者のことを、「チューケン研究者の小野です」とある人に紹介してくれた。「"チューケン"って『中堅』?」。私が入社した頃「中堅」と呼ばれていた人たちは、組織の原動力の中核を担いながらも、若手の話も分かってくれる、頼もしく憧れの存在だった。いつの間にかその中堅層になったのか。言われてみれば入社から14年。応化の同級生たちは学会などで見かけるとすっかり立派になっている。自分では頼りなくても、周囲から見れば中堅層なのだろう。

筆者は、1990年に応用化学科入学。知る人ぞ知る"応化ギャルズ"の一員である(研究室配属女子人数枠を撤廃して頂いた代)。1994年3月に菊地研を卒業後、同4月、菊地研出身の一回り年上の先輩に憧れ、菊地先生に書いていただいた推薦状を握り、三井東圧化学株式会社(現三井化学)に入社した。配属されたのは、横浜の総合研究所触媒研究部基盤技術グループ。発足したばかりのこのグループの使命は、触媒表面が実際に使用する環境下でどのような挙動をするかを知ること、調べるための基盤技術を確立することだった。ここで出会った上司(山本貞明氏、現北海道大学特任教授)に、サイエンスの楽しさ、実験データや実験装置に対する愛情を学んだ。しかも学部卒だった私に何でもやらせてくれた。論文執筆も国際学会招待講演も。上司の先見の明と先輩方のサポートのおかげで2000年3月に日本化学会技術進歩賞(「原子間力顕微鏡を用いた工業触媒表面解析技術」)を受賞し、2001年6月には理学博士の学位まで頂いた(北海道大学喜多村昇教授)。

さらに2003年から2年間、海外研究派遣制度によりフランス、ストラスブールへ渡る機会を頂いた。ドイツと隣接する人口26万人の街。交互吸着法という高分子薄膜作製技術を、開発したGero Decher教授から直々に習った。固体触

媒も高分子薄膜も、悪魔が棲むといわれる「表面」が全てを決める。難しくだからこそ極めて面白い。研究以外にも色々なことを学んだ。言葉、習慣、食文化、建築、音楽。実に多様な世界だった。自分もその「多様性」のなかの一つだった。その中でどうにかやっていくには、自分を「客観的に見て」相手にわかる言葉で自分の考えを述べ、自分自身でいることがいかに重要なことかに気づいた。現在は千葉県袖ヶ浦にある研究センターマテリアルサイエンス研究所で、材料表面制御や薄膜作製に関する基盤技術研究をしている。研究のような専門的な仕事には、自分の分野を深く掘り下げることが肝心。でも自分の研究を事業に結実させるためには、開発や製造、営業、顧客の方々にその良さを理解してもらわなければならない。日本からフランスへ行ったときに痛感した、「客観的にみる」ことの大切さと難しさを、今もまた痛感している。

2009年4月、なんと！菊地研出身の一回り年下の後輩が、三井化学に入社する。希望に胸を膨らませた優秀な後輩がやってくる。果たして自分はある一回り年上の憧れの先輩のようになっているのだろうか。いや、あの先輩にもあの上司にも全然近づいていない。ピンチである。でも少なくとも、先輩たちが私達をどんなにかわいがり育ててきてくれたか今なら少し分かる。後輩たちの夢が少しでも現実に近づくように、先輩たちが私たちのためにしてくれたことをどうにか引き継いで伝えていきたい。"チューケン"の挑戦は続くのである。